

## 立川断層帯

JJSXA/池

2011年6月9日に、政府の地震調査研究推進本部から「立川断層帯」の評価が発表されました。

「立川断層帯」は長さ 33 キロメートルで、埼玉県飯能市から東京都青梅市、立川市、府中市へと、私の自宅からだ、北西方向から南東方向へ延びていますが、五日市街道をまたぐ地点は、自宅の西、約 500～600 メートルくらいの所、正に断層帯の上に住んでいるような状態で、このニュースは聞き捨てはできませんでした。

東日本の大震災の直後ですから本当に気になります、地震の最新の活動時期は、約 2 万年前～1 万 3000 年前で、地震が発生する間隔を示す平均活動間隔は 1 万年～1 万 5000 年程度というから、そろそろ活動があっても不思議ではない時期にあるようだとのこと。

地震の発生確率は、30 年以内にほぼ 0.5%～2%と予測、東海地震の発生確率が 30 年のうちに 87%だから、それに比べるとかなり低い数字で、大雨や大風で罹災する確率(約 0.5%)や、火災で罹災する確率(1.9%)とほぼ同じと考えていいようです。

予想される地震の規模はマグニチュード 7.4 程度で、立川市や羽村市、武蔵村山市などでは震度 6 強の揺れが想定されるとのこと。

今回の東日本大震災によって「地殻変動の力の具合が大きく変わってきた」とみていて、その影響で他の断層帯がまた地震を引き起こす可能性があります」ということですが、断層帯が引き起こす地震は、海底のプレートが動く海溝型地震に比べて地震が発生する間隔が長いのが特徴という。

「立川断層帯」なども、「他の断層帯に比べて可能性を指摘しただけで、発生確率が上がったわけではありません」となっています。

30 年以内の確率は 0.0%～、それを過ぎると確率が飛び抜けて上がる…というような話なら、その頃には当然存命していないから、大いに結構な話となるのですが、そうは問屋が下ろしません。

震度 6 強の揺れがあると、我がボロ屋は、一たまりも無く倒壊という浮き目に会うことでしょう、予告も無く、一瞬に家が倒壊、下敷きになって一巻の終りなら、それはそれで良いが、別の事態ではどんなことになるでしょうか？

「備えあれば憂い無し」という言葉もあるものの、ものぐさで、備えが全然できていませんが、発表内容の最後の方の…発生確率が上がったわけではありません…の言葉を信じ、今まで通りの生活で良いんだと、自分に言い聞かせています。

ただ、今回の東日本大震災発生時に困ったこと…食糧や水の備蓄が無い、車のガソリタンクはほとんど空っぽ、乾電池の買い置きが無い、その他諸々…そんなこと位は改善した方が良いでしょう、若干は、以前と違ってきました。